

此地<sup>○青</sup>戸村の農民茂右衛門といへるものは是を持傳ふ、賞すべきものにもあらざれど、たゞ上古質朴の風俗を想像にたれり、依て其圖をこゝに擧るのみ、<sup>○圖</sup>土人此器を青砥左衛門<sup>○藤</sup>網が工夫に出たりと云傳れども、其可否は論するにたらず、今も野州邊の農家は是を用ゆるものあり、其圖左のごとし、

全形圖のごとく杉をもつて製す、竹の厚きを鋸の齒のごとくにして、夫を横の板へ切はめ、横板の上より同く竹の縁を打付て動かぬやうにしたる物なり、或人の説に、菖蒲革に<sup>△△</sup>かくのごとき紋あるを、俗にわさびおろしといふも、此器の形を借ていひ出せしならんと、是まからん歟、又下に<sup>○圖</sup>略する物も、其製大方同うして、形すこしく異なり、

〔世間學者氣質〕<sup>二</sup>理屈はくさふても新らしい儉約奉行

其年の臺所入用勘定<sup>△</sup>上げ、去年の御物入とは三ヶ一、是はどふじやと、帳面吟味すれば、去年中に鍋釜の仕かへが千八百七十二、山葵おろしが七百卅枚、<sup>○下</sup>略

〔鶉衣<sup>前篇</sup>上〕摺鉢傳

なら坂やわさびおろしのふた面、<sup>○下</sup>にもかくにもたゝすむかたなく、<sup>○下</sup>略